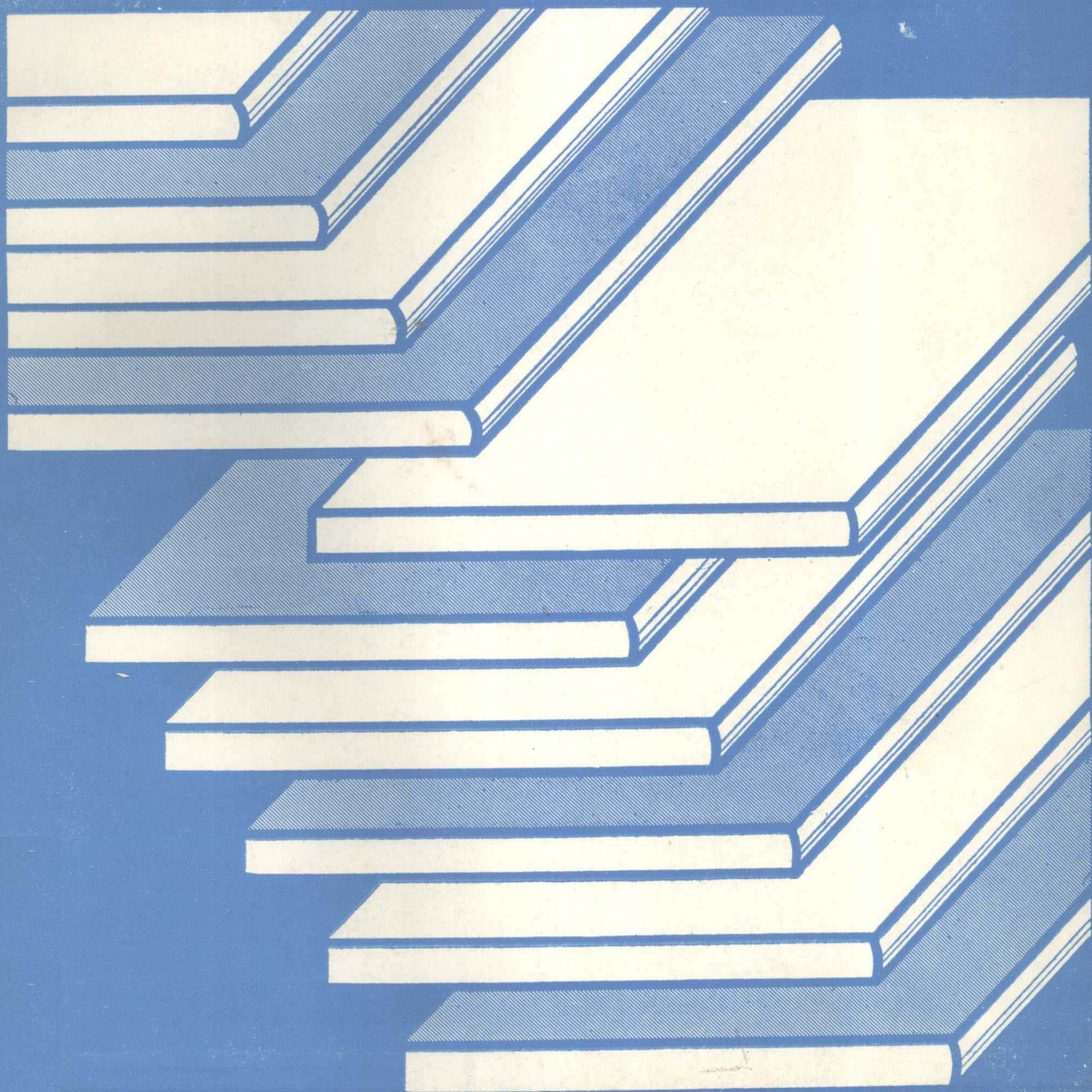


教師用日本語教育ハンドブック

別冊

教科書解題

国際交流基金



教師用日本語教育ハンドブック別冊

教科書解題

国際交流基金

●執筆

河原崎 幹夫

1934年、東京に生まれる。
国学院大学国文科卒業。
現在、東京外国語大学附属日本語学校教授。

吉川 武時

1938年、浜松に生まれる。
東京外国語大学イタリア語科卒業。
現在、東京外国語大学附属日本語学校助教授。

吉岡 英幸

1942年、広島に生まれる。
早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。
現在、東京外国語大学附属日本語学校助教授。

●編集

国際交流基金日本研究部日本語課

編集助手 高梨 玲子
宮本 万里

まえがき

このたび、「教師用日本語教育ハンドブック」シリーズの別冊として「教科書解題」を改訂刊行いたします。

昭和51年に発刊された旧版が絶版となったあと、内外の日本語教育関係の方々から教科書に関する新しい情報が欲しいという要望が寄せられており、これに応じて56年より改訂の準備を進めてまいりました結果、今回ようやく再版の運びとなったものです。

執筆は、旧版に引き続き河原崎幹夫氏と吉川武時氏にお願いするとともに、新たに視聴覚教材の項を設け、吉岡英幸氏にご参加いただきました。

旧版刊行以来、新しい教科書が開発される一方、前に出ている教科書が使命を終えて消える等、この7、8年の間にかなり変動がありますので、新版では最新の情報を正確に盛り込むよう努め、かつ教材の比較対照が行われやすいようにそれらの情報を整理し、統一的に提示するよう留意いたしました。教科書の選定、教材研究、教材開発のための資料として、旧版にもまして巾広くご利用いただければ幸いです。

なお、本書、本シリーズに関する各方面の方々のご意見、ご批判をお待ちいたしております。

昭和58年3月

国際交流基金

日本研究部 日本語課

目次

まえがき

第1部 教科書概説

I. 歴史的に見た語学教育の流れと教科書	3
II. 現在における日本語教育の二つの流れ	6
III. 日本語教科書の実状	9

付表：短期学習者用初級教科書文型・文法事項一覧
初級教科書各課提出文型・文法事項一覧
中級教科書各課タイトル一覧

第2部 教科書解題

I. 初級・中級・上級をそなえる教科書

☆ 国際学友会日本語学校編

1 NIHONGO NO HANASIKATA (How to Speak Japanese)	23
2 よみかた	25
3 日本語読本 一	25
4 日本語読本 二	26
5 日本語読本 三	27
6 日本語読本 四	28

☆ 長沼直兄編著

7 (Naganuma's) Basic Japanese Course	29
8 (再訂) 標準日本語読本 卷一	30
9 (再訂) 標準日本語読本 卷二	31
10 (再訂) 標準日本語読本 卷三	32
11 (再訂) 標準日本語読本 卷四	33
12 (再訂) 標準日本語読本 卷五	33

☆ 国際基督教大学日本語科編

13 Modern Japanese for University Students Part 1	34
14 Modern Japanese for University Students Part 2	36
15 Modern Japanese for University Students Part 3	39

☆ 早稲田大学語学教育研究所編

16 外国学生用日本語教科書 初級	40
17 外国学生用日本語教科書 中級	42

☆ 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校編

18 日本語 I	43
19 日本語 II	45
20 日本語 III	46

☆ 大阪外国語大学留学生別科日本語研究室編

21 Basic Japanese; Intensive Course for Speaking and Reading Vol. 1, 2	48
22 Intermediate Japanese (中級日本語) Vol. 1, 2	50

☆ アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター編	
23 Basic Japanese; A Review Text	52
24 Intermediate Spoken Japanese	54
25 Integrated Spoken Japanese I Vol. 1, 2	54
☆ ランゲージ・サービス社刊	
26 Intensive Course in Japanese; Elementary Part 1, 2	58
27 Intensive Course in Japanese; Intermediate	60
II. 初級および初・中級教科書	
☆ 青山スクール・オブ・ジャパニーズ編	
28 Intensive Spoken Japanese Book 1~3	63
29 Intensive Spoken Japanese Book 4, 5	65
☆ 亜細亜大学留学生別科編	
30 現代日本語	67
☆ 海外技術者研修協会編	
31 Nihongo no Kiso I, II (日本語の基礎)	69
☆ 学習研究社刊	
32 Japanese for Beginners (日本語入門)	72
33 Japanese for Today (あたらしい日本語)	73
☆ 国際学会日本語学校編	
34 How to Use Good Japanese (正しい日本語)	76
35 日本語 (為漢語系学習者編写的日語課本)	78
36 日本語 I	79
☆ 国際協力事業団 (JICA) 編	
37 Japanese Conversation; An Intensive Course	82
☆ 国際交流基金編	
38 日本語初歩 I, II	84
☆ 千駄ヶ谷日本語教育研究所編	
39 Comprehensive Japanese (わかる日本語) Part 1~3	86
40 Comprehensive Japanese (わかる日本語) Part 4, 5	89
☆ A. Alfonso 著	
41 Japanese Language Patterns Vol. 1, 2	92
☆ A. Alfonso, S. Gotoo, S. Hoaas 著	
42 Japanese (日本語) Book 1, 2	96
☆ A. Alfonso, K. Niimi 著	
43 Japanese; A Basic Course	99
☆ N.S.Brannen 著	
44 Japanese by the Total Method; Basic Part 1~3	102
☆ C.J.Dunn, S.Yanada 著	
45 Teach Yourself Books; Japanese	104
☆ P.V.González 著	
46 Gramatica de la Lengua Japonesa (日本語文典)	105
☆ N.Inamoto 著	
47 Colloquial Japanese	108
☆ E.H.Jorden 著	
48 Beginning Japanese Part 1, 2	110
☆ E.H.Jorden, H.I.Chaplin 著	
49 Reading Japanese (日本語読本)	113

☆ F. Koide 著	
50 Easy Japanese I, II	115
☆ K. Kuwae 著	
51 Manuel de Japonais Vol. 1, 2	116
☆ S.E. Martin 著	
52 Essential Japanese	121
☆ O. Mizutani, N. Mizutani 著	
53 'An Introduction to Modern Japanese	124
☆ A. Mori 著	
54 Leçons de Japonais (日本語教科書)	127
☆ N. Naganuma, K. Mori 著	
55 (Naganuma's) Practical Japanese (Basic Course)	129
☆ T. Niwa 著	
56 First Course in Japanese Part 1, 2	130
☆ T. Niwa, M. Matsuda 著	
57 Basic Japanese for College Students	132
☆ K. Ogawa 著	
58 New Intensive Japanese (日本語—入門から中級まで) Part 1, 2	133
☆ Y. Ogawa, J. Sato 著	
59 日本語四週間 (Colloquial Japanese in Four Weeks)	135
☆ A. Rose-Innes 著	
60 Fundamental Spoken Japanese Part 1~3	136
☆ M. Soga, N. Matsumoto 著	
61 Foundations of Japanese Language (英文基礎日本語)	136
☆ S. Tamamushi 著	
62 Einführung in die Japanische Gegenwartssprache (現代日本語入門)	140
☆ T. Uehara, G. N. Kiyose 著	
63 Fundamentals of Japanese (日本語入門)	144
☆ O. Vaccari, E. E. Vaccari 著	
64 Complete Course of Japanese Conversation Grammar (日本語会話文典)	146
☆ J. Young, K. Nakajima 著	
65 Learn Japanese; College Text Vol. 1~4	151

III. 中・上級教科書

☆ 東海大学留学生別科編	
66 日本語 中級 I (Intermediate Japanese I)	155
☆ E. Daub, R. B. Bird, N. Inoue 著	
67 Comprehending Technical Japanese (科学技術日本語入門)	156
☆ H. Hibbett, G. Itasaka 著	
68 Modern Japanese; A Basic Reader (日本現代文読本)	159
☆ G. Itasaka, S. Makino, K. Yamashita 著	
69 Modern Japanese; An Advanced Reader (上級日本語読本) Vol. 1, 2	161
☆ R. A. Miller 著	
70 A Japanese Reader; Graded Lessons in the Modern Language (現代日本文 読本)	162
☆ O. Mizutani, N. Mizutani 著	
71 An Introduction to Newspaper Japanese	163

☆ P.G.O'Neill, S. Yanada 著	
72 An Introduction to Written Japanese (日本文入門)	166
☆ H. Teramura	
73 An Introduction to the Structure of Japanese-Workbook 1~4 (上級文法教本 第1分冊~第4分冊)	166
IV. 副教材・その他	
☆ 海外技術者研修協会編	
74 日本紹介 (Travel in Japan)	169
☆ 国際交流基金編	
75 日本語 はつおん	172
76 日本語 かな入門	173
77 日本語 漢字入門	175
☆ 新宿日本語学校編	
78 実用日本語 I ひらがな編	176
☆ 文化庁文化語部国語課編	
79 外国人のための日本語読本 初級・中級・上級	178
☆ 日本語教育学会編	
80 日本の地理 (日本事情シリーズ)	182
81 東京 (日本事情シリーズ)	183
82 新幹線 (日本事情シリーズ)	184
83 日本人の一生 (日本事情シリーズ)	185
☆ 宮田斉門 (王福智) 著	
84 にほんごひらがな学習導入書 (Easy Steps in Learning Japanese Hiragana)	186
☆ P.G.O'Neill 著	
85 Japanese Kana Workbook	187
☆ 豊田豊子著	
86 よく使われる新聞の漢字と熟語	188
V. 視聴覚教材	
1 日本語教育映画	文化庁
2 日本語教育映画 基礎編	国立国語研究所
3 日本語教育ビデオシリーズ	国際交流基金
4 日本語学習ビデオ教材番組	日本テレビ放送網文化事業団
5 生活の中の文字一駅でー	文化庁
6 日本語教育用スライドバンク 場所シリーズ, 生活シリーズ	国際交流基金
7 Aural Comprehension Practice in Japanese Language	ジャパン・タイムス

英文書名索引
和文書名索引

第一部

教科書概説

日本語教育の関係者が集まると、まず最初にする会話は、「おたくではどんな教科書を使っていますか。」ということである。どんな教科書を使っているかを聞いただけで、どんな教育がなされているか想像することができるのである。その時、「プリントを使っています。」とか、耳慣れない教科書名を告げられると、「それはどんな教科書ですか。」と、さらに会話が続く。

「〇〇における日本語教育」などという世界各地での日本語教育の報告が、よく目につくようになった。海外に派遣されていた日本語講師が帰国すると、決まって、学会などで、その派遣国での日本語教育の実態を報告させられる。そういう報告はまず、その国のある大学（あるいは特定の機関）のカリキュラムから始まる。「初級日本語 ○時間、 中級日本語 ○時間、 会話 ○時間、 作文 ○時間、 文法 ○時間」とかというあれである。そして、その横に使用教材名が記される。この場合も、教材を知れば、報告の内容は大方理解できる。

教科書はあるメソッドに基づいて作られている。つまり、あるメソッドを具現化したものが教科書である、と言える。

メソッドとよく似た言葉に、教授法という言葉があるが、メソッドと教授法とは、次のように異なった概念の言葉である。つまり、メソッドとは、根本思想あるいは哲学のことであり、静的な概念である。一方、教授法とは、やさしく言うと、教え方ということで、教室作業の技術的なあり様のことであり、動的な概念である。

メソッドと教授法とは、このように、思想と技術、静と動というように次元の異なる概念であるから、どのメソッドに基づいて作られた教科書も、どの教授法とも組み合わせることができるのである。例えば、 M_1 の教科書 (M_1 のメソッドに基づいて作られた教科書のことを簡単にこう言うことにする) を

用いて、 K_1 の教授法をとることもできるし、 K_2 の教授法をとることもできる。また、 M_2 の教科書を用いて、 K_1 の教授法をとることもできるし、 K_2 の教授法をとることもできるわけである。

しかしながら、あるメソッドの教科書は、ある教授法のもとで使われると、最高にその機能を発揮するということがある。この教授法をとるなら、この教科書がいいとか、この教科書はこの教授法に向いているとかいうことは当然ある。そこで教科書選択のことが問題になってくるのである。本概説では、Ⅰで語学教育一般の歴史的考察を、Ⅱで現今の日本語教育界の考察を、Ⅲではさらに具体的に日本語教科書の作りについて述べる。日本語教科書を考える上での参考にしていただければ幸いである。

1. 歴史的に見た語学教育の流れと教科

語学教育の流れを歴史的に眺めると、時代の変化とともに、メソッドも教授法も変わってきている。これは、時代とともに、世の中の人が語学教育に期待・要望することが変わってきたからである。この変化は大まかに次の三段階に分けることができる。

- ①語学の目的が外国語で書かれたものを読み取り、先進国の知識を吸収することだった時代
- ②外国との人の往来が盛んになり、個人と個人との口頭によるコミュニケーションが問題となった時代
- ③コミュニケーションをよりなめらかにするために、“スピーチパターン”を問題とするこれからの時代

日本では①の時代は、およそ明治から昭和の戦後しばらくの間まで続いたと言える。②の時代は、60年代半ばごろから現在まで、③の時代は、まさにこれからと言える。

以上は時代による区分であって、そこでの主たるメソッド、教授法がその時代だけのものであったわ

けではない。

以下、この三段階それぞれの特徴と、その主なメソッド、教授法、教科書について述べる。

1. GTの段階

先に述べた①の時代に教える主なことは文法であった。文を理解するには、まず単語の意味を知らなければならないが、これは、主として、辞書という形で与えられた。しかし、単語の意味を覚えただけでは、文として何を意味しているか分からない。そこで文法が必要となってくるわけで（これはどの時代についても言えることである）、この時代に教える主なことは文法だったのである。また、外国の書物を読むことが語学教育の主な目的だったから、外国語→本国語の翻訳が主な課題であった。

こういう考えを基盤とするメソッドを文法翻訳法（Grammar-translation Method 略してGTメソッド）と言う。この方法の場合、翻訳といっても、それは、外国語→本国語という一方交通の翻訳で、逆の本国語→外国語という翻訳は、文法を固めるための練習としてしか行わない。

このメソッドは、時代の要求として、先に述べた時代には有効であった。このメソッドによる教授法は、一部に現在まで根強く残っているが、時代の要求とかけ離れたものとして、しばしば非難される。

GTメソッドに基づいて作られた語学書としては、**Teach Yourself**のシリーズをあげることができる。もっともこれは自習書である。このシリーズの中に**Teach Yourself Japanese**もある。中には、工夫をこらしたものもあるが、典型的な課の構成は図1のようになっている。つまり、文法の説明が大きなスペースを占めている。そして終わりのほうに、ほんの申しわけ程度に練習問題（とそれを解くための語彙）がついている。語彙は、見出しが外国語で、その対訳が本国語でついている。練習問題は、たいてい、(1)外国語・本国語訳と、(2)本国語・外国語訳が

図1 GTメソッドの教科書の課の構成

文法の説明	文法の説明
	語彙 外国語—本国語
	練習問題 (1)外国語—本国語訳 (2)本国語—外国語訳

ある。どれも、その課の文法事項を含んだ短い文で、それらは互いに関連のないものである。まとまった読み物などはずっと課が進まなければ出てこない。

2. ALの段階

先に述べた②の時代には、①の時代に教えたことに加えて、正しい発音ということを重視するようになった。また自己を外国語で表現すること（話す・書く）も必要になり、この方面の教育にも力を入れるようになった。語学教育における四技能（読む・書く・聞く・話す）ということが言われるようになり、どれもバランスよく修得させることがよいとされるようになった。

この考えを基盤とするメソッドは、耳と舌（口）を、以前の時代に比べて、重視するところから、**Audio-lingual method**（あるいは**Audio-oral method**）と言われる。日本語では単に「オーラル・メソッド」と言われる。ここでは略して、ALメソッドと言うことにしよう。この方法では、耳と口を動員し、聞くこと・話すことを中心に授業が進められる。

ところで、文法の重要性は、どの時代にも変わらないことは先に述べた。しからば、ALメソッドでは、文法をどのように考えているのであろうか。ある教師は、なるべく文法を意識させないようにして指導するのがよい、と考えているが、これでは、能率的な教育は出来まい。限られた時間で、出来るだけ能率よく、しかも成人を相手に教えるには、A

Lメソッドでも、文法を軽視してよいはずはない。ALメソッドは文法を軽視しているように見えるが、実はそうではないのである。ALメソッドでは、文法は「文型」ということばに名を変えて教えられている。つまり、**文法と文型とは同じことを指す**のである。共に、言葉のきまりといった意味だからだ。しかし、どういいうわけか、ALメソッドでは、文法という言葉が嫌われ、「文型」「基本文型」「文型練習」などという言葉が好んで使われている。

ALメソッドの教科書の課の構成は、大体図2のようになっている。

図2 ALメソッドの教科書の課の構成

語彙(自国語—外国語)	練習問題
ダイアログ	
文法の説明	
練習問題	読み物

語彙は次のダイアログに出てくる語句の説明である。GTの教科書の語彙と発想が逆で、つまり、自国語が先にあり、これを外国語でどう言うか、ということ外国語が後に書いてある。

ダイアログとは、一まとまりの短い会話のことである。学習者はこの短い会話を模範文として暗記させられたりする。

文法の説明は、著者の言語理論を展開するところである。ALの教科書では、文法の説明にあまり多くのページ数をさいていない。それで、なるべく簡単に、しかも正確に記述しなければならないので、著者の苦心するところである。

練習問題は、かなりのページを使っている。練習には、ドリルとエクササイズの種類がある。ドリルと言うのは、主に口頭で行う練習で、与えられた刺激に対して、即座に反応することを要求されるもの(教科書には、その際与えるべき文や語句が印刷

してある)、エクササイズと言うのは、主に書いて答えるもので、少し考えさせる要素を含んだ練習問題である。

読み物とは、その課に出てきた、語彙や文法事項を組み合わせて作った、短いまとまりの話である。ALの教科書では、会話で導入して、読みもので終わるように、オールラウンドな活用が出来るように編まれている。

以上見たように、ALの教科書の特徴は、練習問題の多いこと、とすることができる。また、教科書にはテープがつくのが当然だと考えられるようになった。

3. SLの段階

この前の段階で、正しい発音・文法・語彙だけを教えても、コミュニケーションに差し障りがあることが分かってきた。例えば、「つまらないものですが」「何もありませんが」「考えておきます」等のことばの真意を取り違えてしまう、先生に向かって「あなたは…」と言って、先生をむっとさせてしまう、「先生の月給はいくらですか。」などと、エチケットに反する質問をしてひんしゆくを買う、「おはようございます、田中さん。」などと日本人の習慣にないあいさつの仕方をして、聞く人を変な気持ちにさせる、(日本人社会では、ふつう名前は言わない。)など真意を正しく、快く伝えるのが難しい。

そこで新しい問題が提起されたのである。その問題というのは、コミュニケーションを円滑にするために、発音・文法・語彙の他にもう一つの何かを教えなければならないが、それはどんなことか、という問題である。上にあげた例は、あるいは言い回しの問題、あるいは敬語の問題に帰せられるかもしれないが、この何かは、それだけでなく、もっと広く、社会習慣の問題としてとらえるべきものである。

これは、社会言語学の課題の一つである。ここで、この何かを仮にスピーチパターンと呼んでおく。この

段階は、社会言語学 (Socio-linguistics) 的アプローチが必要なところから、SLの段階と言うことにしよう。しかし、スピーチパタンということを、意識的に問題にしはじめたのは最近のことなので、実際に教えるべきスピーチパタンの体系というものは、まだ出来ていない。無意識的には、以前からも、言い回しの問題、敬語の問題、会話習慣の問題などとして、触れられてはいた。

意識的にスピーチパタンの問題を取り上げて編まれた日本語の教科書として、まず水谷修・水谷信子編著 *An Introduction to Modern Japanese* をあげなければならない。これについては、本編で解説した。また、水谷氏は *Nihongo Notes 1~5* を書いている。これは、教科書ではないが、スピーチパタンの問題を集めて、日本語の学習者の失敗談の形を借りて解説したもので、日本語の学習者にも、教師にも、研究者にも、また日本の高校生にも有益な本である。(「日本の高校生にも」と言ったのは、やさしい、それでいて本格的な英語で書いてあり、英語の勉強にも役立つと思ったからである。)

次に、Alfonso 著 *Japanese, a Basic Course* をあげることができる。本編の解説にも記したが、この本の Useful Expressions は、スピーチパタンの解説を集めたところで、これを読むと、ある程度まとまったスピーチパタンの概念が得られるかとも思う。

II. 現在における日本語教育の二つの流れ

1. たてがき派とよこがき派

現今の日本語教育界を見ると、大きく分けて、二つのグループがあるのが認められる。

一つは国語学から日本語教育に入った人たち、もう一つは、言語学・外国語学から日本語教育に入った人たちである。

この二つのグループのきわだった違いは、まず使用する文法用語の上に現れる。前者は、「食べない」

などの形を“打ち消し”という。この「ない」は“打ち消しの助動詞”である。「食べる」→「食べない」「食べます」と変わることを“活用”という。「あっ!」ということばを“感動詞”という。これに対して後者の人たちは、それぞれ“否定”、“否定形の語尾”、“変化”、“間投詞”という。前者はたてがきを好むのでたてがき派とよぶことにしよう。後者はよこがきを好むのでよこがき派と呼ぶことにしよう。

区別の指標はまだある。非文法的な文に付ける印は、たてがき派は「×」、よこがき派は「*」である。ゼロ記号は、前者は空白で、後者は「φ」で表す。

これをまとめると次のようになる。

	たてがき派	よこがき派
食べない	打ち消し	否定
～ない	打ち消しの	否定形の
	助動詞	語尾
食べる→	活用	変化
食べない		
食べます		
あっ!	感動詞	間投詞
非文法的な文	×	*
ゼロ記号	(空白)	φ

注) たてがき派・よこがき派というアイディアは、1977年ごろ考え、1979年青山学院大学国際部での日本語教授法講座「文法と文法教育」で述べ、同年日本語教育学会主催・国際交流基金協力の日本語教師研修会「文法」で披露したほか、1980年の同じ研修会や、1981年の海外日本語講師研修会(A2クラス)「文法教育」などでも発表した。活字にするのは今回が初めてである。

両者の違いは使用する文法用語の上にだけ現れるのではない。まず根本に考え方の違いがある。それ

が、教授法に対する考え方の違いとなって現れ、教授法の違いとなって現れるのであるが、現実には、両者は互いに研さんしあっているし、また時には妥協もしているので、両者の議論が衝突することはない。

各個人は意識していないかもしれないが、この違いは厳として存在する。大学での専門が国語学だったか、言語学（外国語学も含めて考える）だったかということは、一つの客観的な事実で、あとで変更するわけにはいかないことだからである。

たてがきを好むとか、「否定・語尾・変化・間投詞」という言葉を使うとかということは、その後の環境によって変わらうものであるが、にもかかわらず、ほとんどの場合、大学での専攻によってどちらかになり、その後の状況で態度が変わることはないのである。つまり、大学学部のわずか四年の間に専攻したことで、後々までの態度が決定されるのである。このことは、考えてみれば、大変なことである。

このようにたてがき派とよこがき派との根本の考え方は交わる場所がない。織物のたて糸とよこ糸とは交わるように出来ているのに、日本語教育界のたてとよこは決して交わらない。

2. 教授法上の違い

このようなたてがき派とよこがき派とは、教授法の上で次のような違いをとる。

まず単語の意味をどう教えるかということについて、たてがき派の人は、絵や実物を見せて単語の意味を示す。時には、手足を動かして動作をやって見せて、意味を分からせる。よこがき派の人は、そんなことをする必要はない、対訳の辞書を与えれば済むことだ、と考えている。ただ、それで誤解されそうなところは、特に注意して説明する。

たてがき派の人は、対訳辞書では誤解を招きやすいと言う。たしかにそうである。だから、それは特に注意して説明するのである。だがしかし、対訳辞

書でなく、絵や実物、あるいは動作をやって見せても、誤解をすることはあるのである。

国立国語研究所作成の日本語教育映画基礎篇「さあ、かぞえましょう」の中に、画面に「かぞえましょう」と書いてあって、手品師が帽子からカードなどを数えながら取り出すところがあった。これを見て、ある学生は、「かぞえる」を「手品をする」の意味に誤解した。

対訳で誤解されやすいところはどこか、誤解されないようにするにはどんな説明をしたらよいか、などを考えることが研究であり、その成果として、理想的な辞書ができるのであろうと思われる。

次に文法をどう扱うかということについて、たてがき派の人は、文法を説明しない。練習即説明であると考えている。また、説明になるように例文の配置を考えている。ことばで説明せず、例文で“説明”しようというのである。よこがき派の人は、文法を説明する。文法の説明は重要なことだと考えている。それこそ誤解の生じないようにくわしく説明すべきだと考えている。（もちろん練習もし、例文も必ず挙げる。例文は、説明を分かりやすくするために必要なものだと考えている。）

要するに、たてがき派はモノリンガル方式をとり、よこがき派はバイリンガル方式をとるのである。

これに対して学生の反応はどうか。多くの学生は、絵や実物模型のおもちゃなどを見せられると、子ども扱いされたように感ずるらしい。また文法の説明については、教師たるもの説明できぬはずはない、説明すべきである、と考えているようだ。

3. 教科書の比較

たてがき派とよこがき派の違いは、それぞれの編んだ教科書の上にも現れる。

たてがき派の教科書は、文法を説明しない。そのほうが良いと考えているのである。課の構成はおおよそ図3のようになっている。

図3 たてがき派の教科書の課の構成

本文	練習
	新しい言葉
言葉のきまり	新しい漢字

本文とは、会話体主体の一まとまりの読み物で、ダイアログとは限らないもの。文法事項を提示するための、状況設定とも言えるものである。

言葉のきまりとは、いわゆる文法の説明にあたるもので、例文が配列されているところ。例文の配列によって、文法を“説明”しようというわけである。

練習は、文法事項を練習するところ。

新しい言葉は、その課に新しく出た語彙を、なんらかの方式でまとめて提示するところ。

新しい漢字は、その課に新しく出た漢字を、その読み方と共に示すところ。読み替えの場合も、そのように明記した上で示す。

文型の配列順で言えば、第一課は「これは――です」の文型で始まる。

よこがき派の教科書は、文法を説明する。課の構成は、前節でALメソッドの教科書として示したのと大体同じ。つまり、現在は、ALの段階にあり、別の見方で見ると、これにたてがき派とよこがき派がいるということなのである。そして、ALの中でも、たてがき派の教科書は、先にALの教科書として示したものより、少し変わっているということなのである。しかしこの変わり方は、大きなものではないので、共にALの教科書として考えられる。

比較してみて、違うところと言えば、標準ALの「ダイアログ」が、ダイアログに限らず、読み物などを含んで、課の最初におかれるかなりのスペースの「本文」になったこと。「文法の説明」が「言葉のきまり」となったこと。「語彙」が課の最初でな

く、おわりの方に移って、対訳でなくなったこと。それに、「新しい漢字」などがつけ加わったことである。(もともと、漢字の説明は、標準ALの教科書にも全くないわけではないから、この点も、変わっているとは言えないわけだ。)

この違いは、結局、「文法の説明」か、「言葉のきまり」か、ということで、文法の説明を明示的にするか、例文で以って文法の“説明”を暗示的にするか、の違いということになる。

文型の配列順で言うと、標準ALの教科書も、第一課は「これは――です」の文型で始まるものがあるが、「ニュースを聞きました。」「どこへ行きますか。」など、動詞文で始まるものもある。

以上のように、たてがき派、よこがき派ということの規定すると、もうこれは物理的なタテガキ、ヨコガキということとは、離れてくる。実際に中国に、たてがき派の思想で、横書きされた教科書と、その逆のとがある。前者は黒龍江省新華書店発行の「現代日語語法手冊」(活用表)で、後者は吉林省新華書店発行の「日語読本」(変化表)である。

4. 相互影響

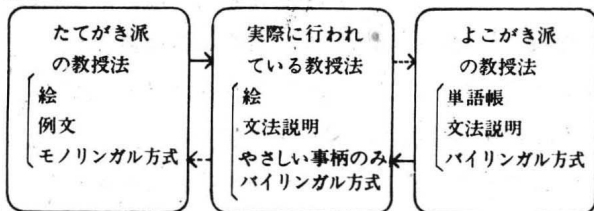
以上は、典型的なたてがき派とよこがき派のことを述べた。ところで、彼らは互いに研さんしあっている、互いに他派のこともよく知っている。それで、互いに他派のやり方を取り入れ、その方がいいと思うようになってしまった人たちもいる。

例えば、元来よこがき派の人がたてがき派のやり方を見ていると、絵や実物を使うようになる、そうしなければならぬと考えるようになる。単語帳なんていらぬ、と考えるようになる。対訳の辞書は弊害が大きいと思うようになる。つまり、モノリンガル方式が理想だと思込んでしまう。その結果、学生の前で、へたな英語を使うのは、学期始めの、制度・学校のしくみの説明の時でさえ、恥ずかしいということになる。元来よこがき派の人が、英語学専攻だった人がである。

その逆の場合もある。元来たてがき派の人の中には、単語の意味を説明するのに、単語帳があればいい、と考える人が出てくる。絵や実物は、やむをえぬから使っている、と考えるようになる。文法の説明も、できたら言葉でしてみたい、できないからしかたなく、例文を工夫して配列して、“説明”になるようにしているのだ、と考えるようになる。

この両者がとっている教授法を見る限り、それは同じ様相を呈しているのであるが、互いに理想とするところは、彼らが持っていた本来の教授法と反対の方向なのである。この関係を図に示すと図4のようになる。

図 4



もちろん本来の姿勢をくずさない者もいる。

講習を受けるにも、研究発表を聞くにも、論文を読むにも、その講師・発表者・著者がどのタイプの

何派に属するか、知っているとより有益であろう。

(以上 吉川)

III. 日本語教科書の実状

1. 教科書について

教科書解題と題した本書の初版が刊行されたのは1976年のことであった。日本語教育諸機関の関係者、特に海外の方々から、「日本で使われている日本語教科書にはどんなものがあるか知りたい。」という質問やら、「良い日本語教科書を送ってほしい。」という希望が数多く国際交流基金等に寄せられていたのである。

「良い教科書が欲しい。」「良い教科書がない。」という声は、現在でも相変わらず、どこへ行っても聞かれることである。その要望は、日本語教材が各種多数刊行されている今日でも絶えることはない。「良い教科書」というのは、その機関での「適当な教科書」の意味である。各日本語教育機関には、それぞれ目的・目標・背景を異にした学習者がおり、その目的・目標・背景別に計画された日本語教育が行われているのである。現在では、その学習者が非常に多様化されてきている。1例を挙げるなら、インドシナ三国からの難民に対する日本語教育であり、中国からの引き揚げ者に対する日本語教育であろう。海外に例をとれば、日系人に対する日本語教育の学習者の質の変化であろう。日系人も2世から3世へと世代が交替するにつれ、日系人というよりは、その国の人(外国人)により近づいてしまっており、外国人に対する日本語教育になってしまっているところに、今まで用いてきた「教科書」では対応できなくなっている問題があるのである。

日本語教育諸機関では、かなり積極的に自らの機関に対応した「日本語教材」を開発し、刊行してきている。即ち、自らの機関に受け入れ、あるいは所属する学習者の目的・目標・背景などには、相当な